

あなたの記憶力はどれくらい確かですか？

記憶力は不安定なもので、誰しも気にかかるものです。

以下には、よくありそうな27の状況を設定しています。

自分の記憶力を判定するために、それぞれの状況設定に対してあらかじめ用意した評価の点数（1～9）を付けていってください。

#### 評価の点数

●ここ半年間の間に1回もない	1点
●ここ半年間の間に1回だけある	2点
●ここ半年間の間に1回以上あるが、月に1回はない	3点
●月に1回あるかないか	4点
●月に1回以上あるが、週に1回はない	5点
●週に1回ぐらいある	6点
●週に1回以上あるが日に1回はない	7点
●日に1回ぐらいある	8点
●日に1回以上ある	9点

では、テストをはじめましょう。

- ①物を置いた場所を忘れたり、家の中で物を見失うことがある。☐
- ②今、自分が何をしようとしていたのかを思い出せないことがある。☐
- ③映画のあらすじが、わからなくなることがある。☐
- ④いつものやり方を変えると問題が生じることがある。たとえば、いつも使う物の置き場所を変えたりすると。☐
- ⑤何か大事なことをしたあと、不安になってもう一度それを確かめることがある。☐
- ⑥昨日のことだったのか1週間前のことだったのか、あるでき事がいつのことだったかを忘れることがある。☐
- ⑦自分が使った物をもとの場所に戻すのを忘れることがある。☐
- ⑧何日か前に聞いたことを忘れて、その人に再び尋ねることがある。☐

- ⑨一度読んだことを忘れて、本や記事をもう一度、読むことがある。☐
- ⑩話の途中で我を忘れ、脇道にそれてしまうことがある。☐
- ⑪人に会ったとき、それが友人なのか親せきの人なのか思い出せないときがある。☐
- ⑫たとえば、ゲームや機械の使い方など、何か新しいことを覚えるのに困難を感じることもある。☐
- ⑬ある言葉が、のど元まで出かけているのに、なかなか思い出せないことがある。☐
- ⑭人に言われたことや頼まれたことをするのを、うっかり忘れることがある。☐
- ⑮何日か前のでき事の大切な点を忘れてしまうことがある。☐
- ⑯よくこんなひとり言を言うことがある。  
「今、何を言おうとしていたのかなあ？」☐
- ⑰本を読んでいるとき、話しの筋道を追うことが難しくなることがある。☐
- ⑱大事なメッセージを誰かに言い忘れたり、そのメッセージの内容さえ忘れることがある。☐
- ⑲自分の生年月日や住所、電話番号など、大事な情報を忘れることがある。☐
- ⑳単なるうわさ話と実際のでき事とが頭の中で混乱することがある。☐
- ㉑同じ人に同じ話を繰り返して語ることがある。☐
- ㉒家事や仕事をいつも大ざっぱに済ませ、細かい部分は忘れることがある。☐
- ㉓タレントや有名人の顔を見ても、その名前を忘れることがある。☐
- ㉔物が置いてある場所を忘れたり、まちがった場所を捜すことがある。☐
- ㉕以前に何回も行ったことのある場所で、道に迷うことがある。☐
- ㉖日々の生活で、一度したことを忘れ、また同じことを繰り返して行うことがある。たとえば、一度砂糖を入れたコーヒーにまた砂糖を入れたりする。☐
- ㉗少し前に言ったことや同じ質問を再び繰り返すことがある。☐

合計点

ケンブリッジ大学心理学研究センターの研究によれば、合計点数が25～58点までの人は、確かな記憶力の持ち主です。合計点数が58～116点までの人は平均的な記憶力、116～243点までの人は平均以下の記憶力。

## 覚えることの意味

「指揮者がオーケストラ奏者を導くように、現在が過去を導いている。指揮者は長く響かせたり短く切ったりして、自分の望む音を創り出す。同じように、過去を長く感じさせたり短く思わせたりするのは現在なのである。

現在という時は、過去に光を当てたり影を落したりしながら、互いのつながりを見つけて出しているのだ」

——イタロ・ズヴェーヴォ（一八六一―一九二八年 イタリアの小説家）

## 記憶のもつ多くの側面

しばらく住んでいたなつかしい街に、久しぶりに戻ってきました。時の流れを振り返ると、昔の記憶が次々と甦<sup>よみがえ</sup>ってきます。街の様子、友人と楽しく語り合った喫茶店、小さい頃よく遊んだ庭、初恋の人と一緒に散歩した公園……。しかし今では、古い通りにはスーパーマーケットが建ち、喫茶店には昔の面影もなく、さらに公園にも昔のことが思い出されるものは何ひとつ残っていません。はたして、これらの場所は本当に記憶に残されていたものなのでしょうか？ 現実の世界が変わったのではなく、ひょっとして、それを見ている自分の目が変わってしまったのでしょうか？ それとも、長い年月を重ねるうちに、心の中で昔の記憶が書きかえられてしまったのでしょうか？

記憶や自伝をテーマにした作品を数多く残している女性作家、マルグリット・ユルスナールは、誕生から半世紀を経て、二五年ぶりに生まれ故郷の街、ベルギーのマルシエンヌの家を訪ねてみようと思ったのです。「現在は公立になっていますが、昔よく遊んだ公園は少し小さくなったように思えました。何を見るにしても、記憶の中にあるものを、拡大レンズに通す必要があったのです」

記憶と異なっていたのは、その大きさだけではありませんでした。当時、家族で住んでいた部屋は、市立

図書館になっていました。家具や道具類がなくなってしまった各部屋の様子は、子供の頃のなつかしい記憶と結びつくものは何もなく、その外観にも、一九二〇年代の終わりを思い出させるものは何ひとつありません。それでも、その図書館に昔から通っている年輩の女性がユルスナールのことを知っており、二人で会話をするうちに昔の雰囲気や感覚が甦<sup>よみがえ</sup>ってきたのです。おぼろげな記憶やイメージ、ずっと消えていた人物の顔、そのエピソードなどがひとつ、またひとつと、心の奥底からようやく思い出されたのです。昔のことを思い出す人の心の中には、少しずつ鮮明になっていくイメージのように、人生のすべての時間が静かに横たわっているのかもしれませんが。

それにしても、記憶や思い出とはいったいどんなものなのでしょうか。私たちは人生で出会うでき事や経験をそのまま、イメージとして保存しているのでしょうか。それとも、思い出や記憶は時間とともに、消えてしまうのでしょうか。もし、そのままのイメージとして保存しているのなら、何年も時がたてば、幼児の頃や青少年の頃に抱いていたイメージと現在のイメージとは異なっているのではないのでしょうか。何年も手付かず、ほこりの下に埋もれているにせよ、結局どんな記憶でも脳の特別な場所に保存されているのでしょうか……。

情報処理の偉大な学者でコンピュータの父とも呼ばれているJ・フォン・ニューマンは、次のような計算を残しています。人間が一生のうちに脳に貯<sup>たくわ</sup>えることができる記憶量の総計は、平均して情報の基本単位で

28×10<sup>28</sup>に達するそうです。これは二八〇×一〇億×一〇億ビット、つまり三〇〇〇億ギガビット（注：一ギガビット＝一〇億ビット）に相当します（最近のパソコンは、ふつう二〇～三〇億ギガビットの記憶容量）。私たちの脳には、こんなにも大量に記憶を貯蔵する場所があるのでしょうか。脳の記憶容量に関しては、理論的には可能かもしれませんが。脳には約一〇〇〇億個（一〇万メガ）もの神経細胞があつて、各神経細胞は相互に何十億もの結びつきが可能で、驚異的な数の神経ネットワークを形成する能力があるからです。それに、ひとつの神経細胞がたったひとつの経験（情報）を処理するわけではなく、各神経細胞はいくつかの異なる思い出や経験を処理することができます。実際には、経験や思い出は膨大な量になるため、脳は記憶を分類してカテゴリーに分けながら（たとえば、動物ならば四つ足なのか、毛があるのかないのか、従順なのか攻撃的なのか、家畜なのか野生のかなど）、知的な方法で情報処理するための、さまざまな命令をくださなければなりません。結局、どんなタイプの情報にせよ、思い出したり記憶したりするためには、いまや科学者たちにも知られている、そのような方法を用いる必要があるのです。

しかし、すべての情報や記憶が同質のものとは限りません。長い時の流れを経て、子供の頃過ごした場所を再び訪れるとき、マルグリット・ユルスナールのように、自己の記憶と現実の世界とを対比させる人間は誰しも、自分にとって特別な意味をもっている過去のでき事を心の中に思い起こすのです。昔なつかしい公園を久しぶりに訪れた人は、自分の自伝的な記憶と意味記憶（事実や概念の記憶で言語も含まれる）に頼る

ことになりますが、それによって現在と対比させながら、過去のでき事を思い出すことができます。公園を訪れた人が昔をなつかしく思い出している間、二人の子供がサッカー遊びをしていました。二人の子供から逸れたボールを蹴り返してやる時、その人は無意識のうちに特殊なタイプの記憶、つまり「手続き記憶」を呼び戻していたのです。その記憶には、過去に身に付けた能力や習慣が貯えられています。この場合は、サッカーボールを蹴るとき、どのようにして体のバランスを保つのか、ボールをパスするときはどうぐらの力で、相手との距離はどれくらいがよいのかなどを、本能的に察知することです。

私たちがバイクや自動車に乗る時も、この手続き記憶に頼っています。つまり、以前に走ったときのことをわざわざ思い出さなくても、無意識のうちにエンジンをかけ、ハンドルを操作し、ペダルを踏んだり緩めたりしながら、思う方向に車を誘導することができるわけです。この記憶は過去において努力を重ね、試行錯誤を繰り返して身につけたもののなのです。これは、毎日の習慣的な行為であり、手続き記憶によるそれ以外の多くの行為、たとえば、靴ヒモを結んだり、パソコンで文章を書いたり、シャツのボタンを掛けたりする行為と同じものです。

手続き記憶を呼び戻すときは、その行為を学んだときや方法について決して考えることはありません。しかし、もしその気になれば、自伝的な記憶や意味記憶を通じて、意識的に呼び戻すことができるかもしれません。たとえば、子供の頃にママの手で靴ヒモを結んでもらったときのことや、はじめて自転車に乗ったと

きのことを思い出してみてください。すでに消えてしまったと思っていた過去のイメージや感覚が甦よみがえってくることでしょう……。

いずれにせよ、「思い出」や「記憶」は、(意味記憶を呼び戻すときのように) 過去に向かって旅をするようなものであり、また(手続き記憶を呼び戻すときのよう)に) 過去と関係を結ぶことだといえるのです。「記憶」については、ひとまずそのようなごく単純な定義づけをしておきたいと思います。というのも、この先、記憶についてさらに詳しく考えていく前に、さまざまなタイプの記憶を紹介する必要があるからです。まず最初に、記憶には持続時間の短いものや、何年かの間は持続するものがあります。これが、「短期記憶」とか「作業記憶」と呼ばれるものです。それはちょうど、使ったそばから忘れてしまう買い物リストのようなものです。たとえば、新聞やコーヒー豆、ワインなどを買う必要があれば、買い物に出かける前に私たちは一時的で、その場限りの情報を記憶に留とどめておくことになります。

短期記憶には、一度に六つか七つの情報源を覚える能力があります。それは買い物リストや知人の電話番号など、異なる情報でもかまいません。誰かが「6773561」という電話番号を覚えてくれたとしましょう。私たちはそれを短時間のうちに、「記憶に留とどめる」こともできますが、この番号を「67・73・56・1」とか、「677・356・1」といったように、何個かに分割すると、さらに長い間覚えておくことができるでしょう。ところが、八桁以上の数字になると、たいていの人は繰り返して覚えなければ、

記憶があやふやになってしまいます。このように、何度も書いて覚えたりして、異なる「貯蔵庫」に記憶が「移される」と、「長期記憶」になるわけです。人生のエピソードや有名人の顔、学習した知識などは、この長期記憶に頼っているのです。

ここで、学生時代を振り返ってみましょう。古い校舎の廊下を走っているとき、ある愉快なでき事が起きました。そして今でも、同級生たちとその思い出話をする……。このような呼び起こすタイプの記憶は、特殊であるため、「自伝的な記憶」とか、「エピソード記憶」と呼ばれています。これは、時間、場所、思い出す人の存在という三つの状況がかかわる中で、特定の情報を関連づける記憶なのです。つまり、この場合には「あのとき」(時間)、「校舎の廊下で」(場所)、「あの愉快なでき事が起きた」(思い出す人の存在)という状況が結びついているのです。つまり、エピソード記憶では、思い出す人と思われられる内容との間に、密接な関係が存在しているのです。そのため、思い出す人は、ちょうど過去の複製レプリカのようなものと出くわして、たとえそれがわずかな数のモザイク画や色褪あせた写真のように思われても、その場面を再現するために過去に向かって心の旅をしているように感じるわけです。

遠い過去の記憶がどんなにばやけたものであったとしても、それを思い出す人、思い出そうとする人は、現在との絆きずなを断ち切って、いつも過去に向かって旅立つのです。そして、ほんの短い間、身も心もどっぷり浸ひたっている現実世界から離れ、遠い過去の世界と再会することができるのです。

あなたもエピソード記憶を呼び戻して、遠い過去の時代に逆戻りしてみてください。たとえば、なつかしく思い出される幼児時代に、仲のよかった友人と対立してしまった頃に、あるいは、いまだに不愉快な思い出が残っているでき事が起こった時に——あの時、何があったのでしょうか？ あなたの心を打ったのはどんなことでしょうか？ あなたはどんな役割を演じたのでしょうか？——これがまさに、エピソード記憶です。エピソード記憶とは、思い出す人の内面世界への旅であり、時にはワナにはまったような心境になったり、白昼夢を見ているようにさえなったりします。また、過去のエピソードが変化したり、細部が鮮やかに甦<sup>よみがえ</sup>りたりすることもあります。

すでに述べたように、「意味記憶」にはエピソード記憶と違って、事実や概念、言語などが知識として貯えられています。エピソード記憶も、その気になればこの意味記憶で跡<sup>あと</sup>付けることができますが、意味記憶には前後のつながりがないのです。たとえば、ミラノはローマの北にあって、ヴェネツィアはトリノの東にあるという事実は、何ら前後のつながりをもたない単なる知識にすぎません。ところが、みずからの人生で経験したエピソードには、確実に前後のつながりがあるのです。たとえば、同級生たちに笑われたという小学生時代の思い出などがそれです。

私たちの人生の大部分は、意味記憶的な記憶が基本になっています。この記憶は時の流れの中で、ひとつひとつレンガを積み上げ、知識の構築物を組み立てるようにして作り上げられるわけですが、そのひとつひとつの経験や思い出の起源を跡<sup>あと</sup>付けることは、ほとんど不可能なのです。毎日使っていることばがその例です。これは語彙、文法、構文などの知識からなる、言語的な記憶の集大成というわけです。

## 記録することと経験を理解すること

それでは、さまざまなタイプの記憶のうち、最後の区別について考えてみましょう。

一般に意味記憶は、「陳述記憶」<sup>カテゴリー</sup>の分類に属しています。この陳述記憶は、説明したり、「陳述」したりできる一連の特別な情報や事実によって組み立てられています。たとえば、家の真下を地下鉄Bラインが通っているとか、イタリアはヨーロッパ連合(EU)に加盟しているといった情報は、陳述記憶に属しています。また、すでに述べましたが、自転車に乗ったり、車を運転するような知識は、「手続き記憶」に属しています。陳述記憶と違って手続き記憶は、言葉で説明することがかなり難しいものです。自転車や自動車の運転の仕方を頭の中で学習できるものでしょうか？ 泳ぎ方を言葉で説明できるのでしょうか？ つまり、手続き記憶は、習慣や条件付けが不可欠であり、運動にかかわるタイプの記憶といえます。一方、意味記憶は、認識にかかわるタイプの記憶で、一般に言葉を介して抽象的な記号と結びつけられ、その意味を表現するものです。手続き記憶は進化の流れからいえば、かなり古風なもので(つまり、カタツムリや他の無せきつい動物



などの原始的な生物にもある)、人間にも発祥初期に胚の時代があるように、進化の過程からいえば、記憶の初期の形態なのです。これに対して、意味記憶的タイプの記憶は、進化の段階では後期の形態で(高等な哺乳類だけに備わっている)、手続き記憶に比べるとその発達も遅く、幼児期になってやっと発達ははじまります。社会的なタイプの手続き記憶は高齢になるまで持続し、老人に見られる脳の老化現象(いわゆる老人ボケ)がはじまるまで続きます。ところが、意味記憶もしくは陳述記憶は、大脳皮質の優れた機能に頼っているため、時には三歳になるまでに重要な欠陥に出くわすこともあります。

いずれにせよ、記憶にはさまざまなタイプがあつて、それぞれの側面をもっています。中には、人間の行動にかわり、その「機能」にも役立ち、冷淡で機械的な特徴をもつものや、思い出す人の内面世界に横たわつていて、「暖かく」情緒的な意味をもっているものもあります。一〇〜二〇年前までは、人間の行動を研究する人たちは、記憶に見られる客観的な特徴には、主観的な側面は含まれない、つまり記憶は感情的な言葉で表現できないものと考えていました。このような考え方によれば、知能は単に人間の行動や感情的な経験だけで表されることになります。それは、ちょうど柔らかな球面を打たれたビリヤード球に例えることもできるでしょう。つまり、知能はただそこに残された傷跡にすぎないということです。また、光が陰に転写される白黒写真のように、経験が特定の記号として転写され、その傷跡が知能に残されるというわけです。これに対して今日の心理学者の関心の的は、記憶を主観で情緒的なレベルで捉えて考えることです。つまり、

記憶を客観的な写真として捉えるのではなく、現実世界や経験の主観的な解釈として捉えようとするものです。ギリシアの偉大な哲学者アリストテレスは、すでに記憶が単なる感覚であるのか、それとも物事を解釈することであるのか、みずから問いかけていました。アリストテレスはこう書いています。

「人は自分が受けた印象を記憶するのか、それとも印象をもたした対象を記憶するのか? もし、印象を覚えているのだとすれば、印象のないものは何ひとつ覚えることができないことになる。もし、それが対象物であり、そこから印象を受けたのなら、感覚のないものでも印象のないものでも、私たちはそれを記憶に残すことができるのだろうか? (……) 私たちが心に抱く印象は、自分自身の中にある何かとして、また他人の印象として考える必要がある」

アリストテレスのこの言葉は、人間の知能が、なぜ二重の能力をもちうるのか、つまり知能が感覚を記録することができるとともに、たとえ現実の世界が存在せず、感覚を越えているために自分の中で特定できない時でも、視覚的なイメージの下に現実世界を表現することができる理由を、私たちに教えてくれるのです。このように、記憶には「記録すること」、それを「情緒的に解釈すること」という二つの側面があるわけですが、さらに別の異なる二つの特徴ももち合わせています。それは「観客」の視点と「役者」の視点です。これについては、ある二つの異なる思い出を振り返るだけで十分わかるでしょう。まず、友人の家カレストランで開かれた誕生日パーティーを思い出してみてください。パーティーの席では、あなたが思い出の劇場

で役者のように演じてみせることもできますし、あるいは部外者になって、その情景を外から眺めることもできます。観客になって、どんな人たちがテーブルについていたのか、どんな服装をしていたのか、周りの様子はどうだったのかなどを報告することもできるでしょう。これとは別に、子供の頃、他の子供達と遊んでいたエピソードや教室で学校生活を送っていた時のことを思い出してみてください。あなたは観客としてそれを眺めていますか？ それとも夢中になって「その思い出に引き込まれて」いますか？ おそらく、最初の場面では、観客の視点で誕生パーティーを思い出し、あとの場面では、自分が役者を演じていたかもしれません。

このように、「観客の視点」と「役者の視点」から過去を振り返るといふ、記憶の異なる二面性は、基本的な二つの変数、つまり過ぎ去った時間の長さと思い出す人の印象の強さに関係があります。古い記憶は主に、主役の視点を私たちに与えてくれるのです。一方、新しい記憶は観客の視点を与えてくれます。また、その思い出が情緒的な側面をもっている時もそうです。たとえば、何人かのグループにホラー映画や自動車の事故について話してくれるように頼んだなら、ほとんどの人が観客の視点に立って話をするでしょう。また、ある人が自分の過去の重要なでき事を異なる二つの視点から、つまりそのでき事に関する自分の感情や印象に重点を置くのか、それとも客観的に自分自身のでき事として捉えるかで、状況はさまざまに変わってくるのです。最初の視点に立てば、たいていの人は役者の視点でその思い出を語りますが、後者の視点に

立てば、観客の視点で思い出を振り返るのです。このことから考えると、思い出は現実世界を、単に一方向から心の「映像に残す」わけではなく、(役者の視点のように) 個人的に感情を込めた形で記憶に残す場合もあれば、(観客の視点のように) カメラのような冷静な視点で記憶に残す場合もあるということです。

記憶がもつ、このようなニュアンスに富んだ二面性を明らかにするために、何人かのグループを対象に実験を行った心理学者がいます。その実験は、自分の人生経験を思い出してもらい、「役者の視点」からの思い出と、「観客の視点」からの思い出に分類し、印象の強かった思い出について考えてもらうというものです。実験が始まると、人々は、「役者の視点」から「観客の視点」へ、あるいはその逆方向へと自分の視点を変化させる破目<sup>はめ</sup>に陥ったのです。この実験は、あらかじめ「役者の視点」から思い出した記憶が、「観客からの視点」からの思い出に変わった時、とりわけその思い出の印象が弱くなったことを表しています。この意味をよく理解するには、強く印象に残っている思い出を振り返ってみるといいでしょう。たとえば、ひいきのサッカーチームの決勝戦や、思い出に残る誕生パーティー、恋人へのプロポーズの言葉など、自分の人生の中でもとりわけ魅力的で重要なでき事などです。このような人生の大切なひとときに受けた感動は、たとえそれが時とともに薄れ、形が変わっていたとしても、記憶の中にはしっかりと甦<sup>よみがえ</sup>ってくるものです。ところが、そんな感動的な思い出を「観客の視点」から振り返ったなら、心は「冷めて」、印象の弱いものになってしまふでしょう。結局、記憶にはさまざまな側面があつて、何かを思い出そうとする人は、ただ感情



的なニュアンスを付け加えて、自分の記憶を呼び戻すこともできますし、必要に応じて、あるいは解釈の仕方やその時の心理状態によって、それとは異なる方法で記憶を再構成することもできるわけです。

## イメージを視覚化する

今日心理学者は、視覚による認識や、視覚的イメージと記憶とを結びつける関係について、研究を進めています。この研究は、誰しも経験する奇妙な現象がその出発点になっています。その現象とは、ある人に出会っても「顔は知っているが、その名前を思い出せない」ことです。たとえば、飛行場や駅の雑踏の中で誰かに会った場合、その顔は知っているが名前が思い出せないような時です。そんな時、私たちの心は矛盾した状態に陥ります。つまり、顔には覚えがあるのですが、記憶をたどっても、それが「どこの誰なのか」を思い出せないというジレンマに陥るわけです。

このような、「認識（知っていること）」と「記憶（思い出すこと）」との間の分裂現象は、視覚的なメッセージに対する脳の感受性に負うところが大きいです。つまりこの時、私たちの脳は、どれほど知っているかといった認識能力を伴わず、十分な記憶の跡付けをすることもなく、安定した痕跡を残しうる視覚的なメッセージに対して素直に反応してしまうわけです。名前を思い出せなくても、視覚からの情報に信頼をお

いて、視覚的な記憶が真実と考え、脳はそれが本当の記憶であると私たちに伝えているのです。つまり、感覚的な記憶は、記憶を認識したりその前後関係を明確にする能力よりも優先するということです。実際に、目から入って大脳の視覚野（後頭部にある大脳皮質の部分で、目から入った情報を視覚化する働きがある）に送られる視覚的な刺激は、私たちの知能に大きな影響を及ぼします。それは、目に映るものが「真実」のことであり、信頼すべき現実の経験であると言いつけるのです。というのは、それが私たちにとって直接的な証拠となるからです。

目に映るものに対して信頼を寄せるのは、そのような経験によるものですが、一方、それを感知する大脳皮質の視覚野では、独自に現実世界のネガフィルムともいえる知的なイメージを作り上げ、目から入ってきた情報の注意すべき特徴を私たちに知らせるのです。

目に映る画像と大脳で視覚化された相対的なイメージとの間でギャップが生じるのは、実は物を見るときには、いつも大脳フィルターを通すメカニズムが働くからなのです。このメカニズムは、過去の経験に照らし合わせ、目に映る情景に検討を加え、必要のない部分は無視しながら私たちに注意すべき特徴を教えてください。確かに、視覚的な刺激を解釈する大脳の視覚野で、いわゆる視覚的イメージが生み出され、そこに貯えられることには大きな影響力があります。記憶の主観的な側面も、そのほとんどが、この視覚的イメージに左右されるのです。聖イグナチウス・ロヨラの著書『魂のエチュード』にある、地獄の情景やマスコミ

が与えるさまざまなイメージのように、空想の世界を通してみると、このような視覚的イメージは知性をワナに陥れて偽りのイメージを「創り出し」、空想の世界こそが本物の世界であるかのような錯覚を与えることもあるのです。

しかし、この視覚的イメージを肯定的なものと考えすることもできます。というのも、このイメージによって記憶を定着させることができるからです。赤ん坊の時から、私たちは抽象的な考え方をどんな時に具体的なイメージで表現することができるのかを学んできました。たとえば、スーパーマンは力強さを象徴するようなイメージで表現することもできるでしょう。また、大人にとっても視覚的なイメージで表現して工夫すれば、抽象的な概念も容易に覚えることができます。想像力を働かせることと視覚化することは、知能の二つの働きですが、いずれも知的訓練を通じて強化することもできます。その訓練は、視覚的な「関連づけ」によって情報を記録するような時にも役立ちます。

確かに、過去の経験を思い出す能力は、単に視覚的イメージにだけ頼るものではありません。たとえば、以前読んだ新聞記事は、新聞を読んだ場所やそのページの特徴、記事に添付されていた写真などの視覚的イメージを通さなくても、重要ポイントは思い出せます。一般に、何か読んだものを思い出す時というのは、たとえば記事を書いたジャーナリストの意見に反感をもったことなど、その時の自分の印象と結び付けて記憶に残っていることが多いようです。記憶の強さは（その定着を容易にする視覚イメージがない場合には）、

ある特定の経験にどれだけ注意を向けて自分に印象づけるかによるのです。新聞記事の例では、その記事の批判的な側面に目がとまって、重要ポイントがいくつか頭に残り、さらに一部の情報通によく見られるようにささいな情報にまで目を配っているようなら、それを思い出すことはいつそう容易になるでしょう。結局、よく注意を向けて印象に残すことが、記憶をする場合の基本的な要素となるのです。

うまく思い出せなかったり、覚えられなかったりするものは、注意力不足で印象が弱いためか、何らかの経験をする時に集中力に欠け、ぼんやりしていたためなのです。たとえば、どこかのパーティーに招待されたときでしょう。会場では、はじめて見る顔も多く、何人もの見知らぬ人々に会ったりして、私たちはその会場にいた特定の人物に出会ったことを、ひよっとしたら覚えていられるかもしれませんが、それがどんな体格の人であったかなど、はじめて出会う大勢の人たちの中でその特徴にいちいち注意を払うことはないでしょう。このような不注意な態度が、時として運命のいたずらを招くこともあるのです。何日か後に、パーティーに参加していたその人物に別の場所に出くわし、どこか誰なのかを思い出すことができずジレンマに陥るのです。

## イメージ化と視覚化<sup>ヴァジュアル</sup>

イメージ化、視覚化<sup>ヴァジュアル</sup>することは記憶を容易にします。

何かを記憶するとき、心の中にイメージを描くことは大きな力を発揮します。では、イメージ化の訓練をするためのポイントを紹介しましょう。ウェイトトレーニングや柔軟体操をして特別な「筋肉」を鍛えなくても、テニスの選手がイメージトレーニングによって、全身のバランスを調整し、その能力を高めるように、直接的方法はあなたの記憶力を強化することに役立つでしょう。

### イメージ化

- ・具体的な考え方は抽象的な考え方より簡単に覚えられます。
- ・抽象的な考え方や感覚はイメージ化することで具体的な形に変えることができる。たとえば、感情を激しく揺り動かす音楽は「赤」のイメージであり、冷たい感情を抱かせる音楽は「青」のイメージに置き換えられる。
- ・感情と結びついたイメージはより強く記憶に残る。

- ・個人的な事情と関係のあるイメージは感情に大きなインパクトを与える。

### 視覚化<sup>ヴィジュアル</sup>

- ・どんな人でも目の前にイメージを思い浮かべることができる。
- ・感情的な色彩を帯びたイメージや個人的なことに関係するイメージは、より長く心に残る。
- ・視覚化することは、心の中にどんな絵を描くかということである。そして、心のキャンバスに描かれたそのイメージを十秒ほど、じっと眺めてみることである。

# イメージ化と視覚化のトレーニング

## 1. イメージ化の訓練

心の中に直接思い描くイメージは、抽象的で間接的なイメージより視覚化しやすいものです。しかし、視覚化するには少しばかり想像力を養う努力が必要です。

次のような訓練はありふれたものかもしれませんが、恥ずかしがらずに、心の中に思い浮かぶイメージをじっと眺めて視覚化する「創造の世界」を考えてみましょう。

### ・イメージ化する

- a 昼寝をしている子猫
- b 人ごみにあふれた通り
- c 都会の雪景色
- d ゆっくり流れていく時間
- e ユーモアの心
- f 議論の余地のない側面

直接的なイメージ（「子猫」や「通り」など）から、より抽象的で間接的なものへと集中力を維持しながら、心に思い描けるようにしましょう。

### ・イメージと感情

- a 夜の雷鳴
- b 暗闇に光るナイフ
- c 愛する人との出会い
- d 書類カバンの中を捜し回り、何かを盗もうとしている女友達
- e お気に入りの服についたシミ

一度だけ読んで自分の心に思い浮かんだイメージを紙に描いてください。a～eまでを読んだ時、心の中に感じたことを分析し、そのことばから自分がイメージ化したものと比べるのです。さて、どんなイメージや感情が記憶の中に残りましたか？

## 2. 視覚化の訓練

### ・リラックスした心のイメージ

私たちは心に描いたイメージを視覚化することができます。そして、それが心模様に影響を与えます。たとえば、楽しくて心地よいイメージは心をリラックスさせ、呼吸を整え、筋肉の緊張を解き、心臓のリズムさえ落ち着かせます。

ソファに横になってそっと目を閉じて、次のような情景をイメージしてください。さらにそれを視覚化してみてください。

- a 夕暮れの景色
- b 水平線が続く海の風景
- c 山合いの谷間の情景

イメージを視覚化する能力は訓練によって高めることができます。また心の緊張を「解きほぐす」ために、それを利用することもできるでしょう。

### ・心に描くイメージの世界

記憶をたどりながら目に映った現実世界を心の中に再現することができます。本や雑誌の中から絵か写真を探し出して、その色や形を目に焼き付けるように、1分間ほど、注意深く眺めてください。それから、目を閉じてその画面を心の中にイメージして再現してみます。

心に描いた画面は現実の世界ではなく、単にイメージにすぎませんが、このような訓練によって、ごく短時間に目に映ったものを心の中で視覚化する能力を向上させることができます。

一般に、約六〇%くらいの人たちは視覚的な記憶がよく発達しており、残りの約四〇%の人たちは言語的な記憶の方が発達していると言われています。前者の人たちは、右脳がイメージを視覚化する能力にすぐれているため、右脳に依存する傾向があります。一方、後者の人たちは、言語機能にすぐれた左脳に依存する傾向があるため、言語による表現や記述に才能を発揮します。したがって、イメージを視覚化する訓練は、右脳の能力を強化することに役立つわけです。

先程のパーティーの事例は記憶と認識との間で生じる分裂現象の一例であり、また注意力が記憶と直接結びついている数多くの事例のひとつと言えます。これについては、ごく平凡な訓練をすることで対処できるでしょう。たとえば、刺激を受けたり、ある状況に直面したりすると、そこからさまざまな特徴を引き出し「聞き耳を立てる」能力を養ったり、集中力を強化したりできるのです。ところが、新しい知識や経験、読んだ文章などに興味がわかず、注意を向けることができなければ、イギリス人の二人の心理学者の行った次のような実験に示されている通り、あやふやな記憶しか残らないことになるでしょう。

あるグループは、スクリーンに数秒間、映し出される何人かの顔写真を注視し、もうひとつのグループは、同じ顔写真を見ている間ずっと、実験前に伝えられた電話番号を繰り返し口ずさんでいなければなりません。すでにおわかりのように、最初のグループの人たちは実験後の判定テストで、人物の顔写真をすべて判別することができました。ところが、あとのグループの人たちは、スクリーンを見ながら電話番号を口

ずさんでいなければならなかったので、注意力が散漫になり、人物の顔には見覚えはあるものの、テストで見せられた人物かどうかをうまく判別することができなかったのです。

日常生活でもよくあることです。注意力が足りなかったり、興味がわかなかつたりすれば、テスト2に示すように、私たちの記憶には、ほとんど痕跡が残らないことになります

## のどまで出そうな言葉

それが何であるのか頭ではわかっている気がしても、なかなか口に出てこないことがあります。たとえば、顔には見覚えがあるものの、どこの誰なのか名前を思い出せない時、あるいはある画家について、その表現スタイルや生きていた時代や、「ひまわり」や「キャンベル・スープ」といった代表作を思い出すことができて、肝心の画家名、ゴッホやウオーホルがどうしても口に出てこないような時です。頭の中ではその文字が浮かんだり発音さえ聞こえたりしても、名前が「のどまで出そうに」なっているのに出てこないわけです。そんな時、少しでも記憶の糸をたぐり寄せようと、アルファベットの文字を順番に書いてみたりする人も多いようです。そして、この方法がうまくいかない場合は、特定の母音をアルファベット順に子音の前に置いたり、逆に特定の子音の後ろに母音を置いていく方法を試す人もいます（a b、a c、a d、



## 消えていく記憶？

アメリカには、A man must get a thing, before he can forget it. (物事は忘れる前にモノにしなければならない) ということわざがあります。このことわざの面白さは、getとforgetが韻を踏んでいるところですが、たとえ見慣れたものであっても、注意を怠れば記憶から消え去ってしまうことを戒める意味があります。その意味を考えずに、注意を払わなかったり、いわゆる体で覚える「手続き記憶」や無意識の記憶になっているため、よくある状況や見慣れたものでも記憶から消えているものがあるということです。

それを確かめるために、次のような質問に答えてみてください。

- (1) 交通信号の左端は何色でしたか？
- (2) 10円玉の表と裏のデザインは？
- (3) 流し台の排水口に流れ込む水の渦巻は右巻き、それとも左巻き？
- (4) パソコンのキーボードの一番左上の文字は何でしたか？ では一番右下の文字は？
- (5) 男性用のワイシャツの前ボタンは、ふつう何個ついていますか？

## 正解

- (1) 青色 (2) 表は稲穂で裏は平等院のデザイン (3) (北半球では) 左巻き (4) それぞれQとM (5) 7個

a e、i、b a、b e、b i、b o、b u、c a、c eなどというように)。このような方法が効果を発揮する場合もありますが(テスト3参照)、いつもうまくいくとは限りません。

「のどまで出そうな言葉」現象では、すべてを思い出すために必要な、部分的な情報を見つけ出すことが大切になってきます。たとえば、ときどき会社で会う人物のことを考えて、彼の名前がRの文字ではじまることを思い出したり、イラクの首都がBの文字ではじまることを思い出したりして、それが完全な記憶を「誘い出す」ための部分的な情報を手に入れただけにすぎません。でも、それとは別の情報に「たどり着く」ことができれば、たとえば、Rではじまる人物のことを知っている別の人物のことに気がついたり、イラクの首都について別の機会に『千夜一夜物語』や『砂漠の嵐作戦(湾岸戦争)』といった名前に出会ったりすれば、その人物がリナルドという名前であり、イラクの首都がバグダッドであることを思い出すこともできるのです。

要するに、「ヒント」や「導入のせりふ」が多いほど、記憶を再構成する作業は容易になるわけですが、実はこれが「のどまで出そうな言葉」現象なのです。私たちの知能は、人気のある演劇のようなものだといえます。できるだけ喜劇作家の台本(過去の経験)通りに一連のせりふ(記憶)を語って演じなければなりません。ところが、役者たちは、いつもそのせりふを覚えていたとは限らず、舞台のそでから「導入のせりふ」をささやいてくれる、プロンプターに助けられながら役を演じているのです。

## ヒントと「のどまで出そうな言葉」

頭ではわかっているような気がしても、なかなか思い出せないことがよくあります。そんな時、次のテストのように、ちょっとしたヒントを与えることにより、容易に思い出すことができます。

リスト右側のアルファベットを、紙切れで隠しながら読んだ方がよいかもしれませんが、左側のリストには合計20個の国名が書かれています。それぞれの国名は知っていても、その首都名まで覚えている人は少ないでしょう。そこで、右側のアルファベットのリストを見てください。そこには首都名の頭文字が書かれているわけです。

首都の名前を知っていると思っていた人の約50%は、このちょっとしたヒントが役に立つことがわかるでしょう。でも、そもそもまったく知らない人では、わずか15%の人にしか、このヒントは役に立たないのです。

## 国名 首都名の頭文字

1	サウジアラビア	R
2	ブルガリア	S
3	カナダ	O
4	コロンビア	B
5	大韓民国	S
6	フィリピン	M
7	イラン	T
8	イラク	B
9	ケニア	N
10	レバノン	B

11	ニカラグア	M
12	ノルウェー	O
13	ポルトガル	L
14	ルーマニア	B
15	シリア	D
16	タイ	B
17	チベット	L
18	トルコ	A
19	ウルグアイ	M
20	ヴェネズエラ	C

## 解答

1. Riyadh (リヤド) 2. Sofia (ソフィア) 3. Ottawa (オタワ) 4. Bogota (ボゴタ) 5. Seoul (ソウル)  
6. Manila (マニラ) 7. Teheran (テヘラン) 8. Baghdad (バグダット) 9. Nairobi (ナイロビ) 10. Beirut (ベイル

- ート) 11. Managua (マナグア) 12. Oslo (オスロ)  
13. Lisbon (リスボン) 14. Bucarest (ブカレスト)  
15. Damascus (ダマスカス) 16. Bangkok (バンコク)  
17. Lhasa (ラサ) 18. Ankara (アンカラ)  
19. Montevideo (モンテビデオ) 20. Caracas (カラカス)

「のどまで出そうな言葉」現象では、私たち自身、つまり思い出す人自身がプロンプターになるわけです。結局、（アルファベットの文字や似通った発音の言葉を並べたりして）さまざまな手段で見つけ出したヒントや「導入のせりふ」を利用しながら、意識下、あるいは無意識下で特定の記憶を再構成していくのです。もう思い出せないときあらめかけていた時、「のどまで出そうな言葉」が、ふいに口から出てきたような経験は誰にでも一度はあるはずです。実は、このように突然、記憶が蘇<sup>よみがえ</sup>ってくるのは、私たちが無意識下でその言葉を探し、記憶の再構成に必要な情報を誘い出そうと、部分的な情報を集める作業を続けているからなのです。

記憶は知能の働きによって完全な形で記録されたり、分類されたりしているのではなく、実際にはさまざまな要素に分類されています。それぞれの要素には、分類、統合、類似の記憶との比較、情緒的なニュアンスの読み取りといった形で複雑な作業が求められるのです。そして結局、それらの要素があとになって、その記憶を呼び戻すための「手掛かり」や「導入のせりふ」として役に立つ一連の特徴となるわけです。

## 記憶の呼び水

それでは、どんな状態にも特有のヒントが存在するのでしょうか？ また、どんな人にも「導入のせりふ」

が聞こえてきて、昔の思い出が甦<sup>よみがえ</sup>ってくるのでしょうか？ このような疑問に答えるために、文学から事例を引用して考えていくことにしましょう。これはとても有名な話ですが、記憶のメカニズムを理解するための道へと、私たちを案内してくれるでしょう。

一九〇八年から死を迎える年、つまり一九二二年まで、マルセル・ブルーストは代表作『失われた時を求めて』を書き続け、みずからの幼児期から青年期までを、その作品に注ぎ込みました。ブルーストは、まったく形で時の流れを追いかけるのではなく、人生のひとこまひとこまの思い出を、気まぐれな形で、ふいに浮かび上がってくるままに物語っています。ブルーストの幼児期の思い出の中で、最初の重要なもののひとつが、丸いアーモンド菓子、「マドレーヌ」を味わった時の話です。そして、これが遠い過去の記憶を誘い出してくれています。

「ふいに、思い出が私の前に姿を現した。それは小さなマドレーヌの味だった。日曜日の朝、（その日はミサが終わってから行ったのだけれど）コンブレーの叔母の家にあいさつに行くと、叔母のレオニエがシナノキの花の煎<sup>い</sup>茶に浸<sup>ひ</sup>してから、マドレーヌを私にくれた。（……）叔母の部屋は通りに面していて、灰色がかった古い家の中にあつた。その裏手の庭の前には、両親のために建てられた小さな館があつて、その家と調和がとれていた。（……）我が家の庭とスワンの公園に咲く花々、ヴィヴォーヌ川の睡蓮、村の優しい人たちとその家、コンブレーとその周辺にある教会など、街も庭もすべてのものが、そのカップからはつき

りとした形で浮かび上がってきた」

ブルーストはこの有名な一節で、マドレーヌや煎じ茶の味わいが「つまりヒントや刺激が——心の奥底に埋もれていた幼児期の記憶を、生き生きと甦らせることを語っています。『失われた時を求めて』という作品を書くために、『マドレーヌ』のように、おぼろげな記憶を誘い出してくれる特別な刺激や呼び水などに、偶然、出くわす必要があったのでしょうか。ブルーストはこのようなアプローチがうまくいかないと考えました。失われた記憶のプロットを再構成するために、さまざまな手掛かりやヒント、導入のせりふなどを積極的に求めようとしています。確かに、偶然の出会いには、すべての記憶を再構成しようという試みには、ふさわしいものではありません。しかし、過去の思い出を求める彼の旅は、記憶のもうひとつの側面を明らかにしてくれます。つまり、過ぎ去った時間の流れを感じし、それを思い起こすことは、極端にまで個人的な側面をもっており、ちょうど夢の世界が昼の生活の特徴づける時空とはまったく異なるように、過去の時空と現在の時空とが混じり合っているのです。

思い出すことは過去と現在との間に橋を渡すことであり、ひょっとすれば、まだ起こっていない未来のことを予想することなのかもしれません。実際に、この作品の最後で、ブルーストは長らく会っていない友人たちに会い、彼らの個人的な特徴を明らかにしていく場面を描いています。それは、まるで過去のでき事や甦ってくる記憶に光を当て、その一瞬がはっきりと目に映るような印象を受けます。ブルースト自身は記憶

について、次のように書いています。

「記憶は時空の中に設置された望遠鏡のようなものだ。望遠鏡は裸眼では見えない星を見ることができし、無意識の世界、とりわけ過去の時空に埋もれて、すっかり忘れていたものを意識下で見ることができからだ」

ブルーストの事例は実に文学的なものですが、臨床例の中にも同じようなものがいくつかあります。導入のせりふや「呼び水」、ヒントなどが暗闇から光の下へと移すスイッチの役割を果たし、閉ざされた記憶の扉をパツと開け放ってくれる事例です。ここでは、イタリアの神経心理学グループが詳しく論じているG・Rの臨床例を紹介しましょう。

G・R（偽名のイニシャル）はミラノに住む画家、美術評論家です。一九九二年の春のこと、ある朝、彼はわけの分からない混乱の中で目が覚めました。右腕は動かず、おまけに言葉もうまくしゃべれませんでした。G・Rの症状は典型的な脳血栓のもので、脳の動脈が突然、閉塞（へいそく）を起こしたことによるものでした。しかし、とりわけ問題になったのは、過去の記憶が完全に消えてしまい、自分の身元すら覚えていなかったことです。そして時間の経過とともに、G・Rの記憶喪失はますますひどい症状を示したのです。自分の仕事のことはもちろん、自分の描いた絵も何ひとつ覚えておらず、名前はわかっていても、妻や娘がいることすら忘れてしまったのです。彼の記憶喪失は、ほぼ完全なものでした。最近撮った写真も、脳血栓になる以前から

家族と一緒に暮らしてきたその街も、通日も、彼にとってはすべて見知らぬものだったのです。

このように、過去の記憶が消えてしまう症状は、「逆行性健忘症<sup>けんわうしん</sup>」と呼ばれています。これは記憶が保存されている脳の中心核の部分、つまり左脳の視床（図1参照）の損傷が原因となっています。この症状は脳血栓をはじめ、脳の外傷、精神的なストレスなど多くの臨床例に見うけられます。

G・Rのケースでは、逆行性健忘に、脳血栓後の記憶も失われる順行性健忘も加わっており、複雑な症状を示していました。つまり、G・Rは過去の記憶を失っただけでなく、新しい記憶さえ頭の中に残すことができなかったわけです。

時の経過とともに、彼の症状は悪化していきました。彼は自分を役立たずな人間だと思うようになり、精神的にも抑圧され、自分には何ひとつ表現すべきものはないと感じ、絵を描くこともやめてしまったのです。たとえ、彼に過去のことを語りかけても、部分的には思い出せるものの、自分にとって何ら身近に感じられず、過去を埋め合わせることはできなかったのです。彼自身が言ったように、それは「使い古し」の自伝にすぎなかったわけです。ところが、そんな症状が突然、消えたのです。ここでブルーストの「マドレーヌ」の類推が働くわけです。彼の記憶を破壊してしまった脳血栓から約一年後、G・Rの心臓に不整脈が現れ、それはペースメーカーの植え込み手術が必要になるほどでした。そこで、外科医らは脳の血液循環不良の問題を考慮し、部分麻酔による手術をすることに決めたのです。手術がはじまると、彼は突然、手術台の上で

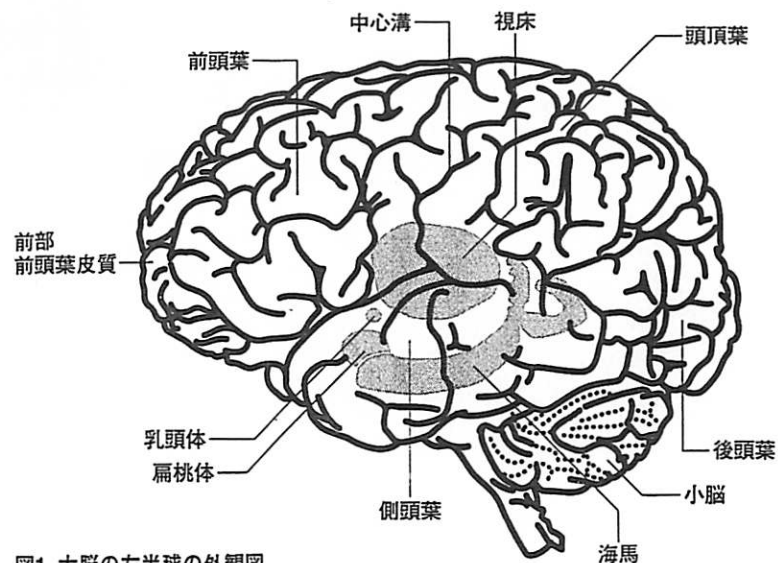


図1. 大脳の左半球の外観図

大脳皮質は数多くの溝によって、前頭葉、頭頂葉、後頭葉、側頭葉などに分けられている。また、各脳葉は、たとえば前頭葉には前部前頭葉皮質があるように、その外面がいくつかの領域に分けられている。大脳の内部には無数の神経組織があり、特徴のある共通の機能をもった神経細胞が集まっている。この図は、ちょうど断面図のように描かれていて、海馬や扁桃体、視床、乳頭体などが見えている。これらの神経組織は左右対称になっており、右半球にも同じ位置にある。

覚醒し、奇妙な感覚におそわれました。それは「どこかで見た<sup>デジャヴ</sup>」ような印象でした。その時彼の頭の中には、生理的機能を低下させる麻酔剤を受けて横たわっている状況が思い出されたのです。それは二〇年ほど前、同じように部分麻酔によるヘルニア手術を受けた時の記憶だったのです。ほんの数秒の間に、バラバラになった過去の思い出が波のように押し寄



せ、彼の頭の中は過去の思い出でいっぱいになりました。それはまるで記憶の流れを堰き止めていた水門がいつきに開けられ、人生の記憶が貯えられていた部屋の扉が開けられたかのようでした。日が経つにつれて、G・Rは過去のことを思い出すようになり、家族のことも語るようになりました。彼は記憶の流れを時間軸の中で捉え、その前後関係を明らかにしていったのです。そして、自分は過去の記憶をコントロールすることができるし、いつでも昔のことを思い出すことができるという自信をもつまでに快復したのです。

このG・Rのケースは、まさに耳目を驚かす事例ですが、これはひとつの刺激（この場合は外科手術）がある特定のできごとと、過去の似たようなできごと（何年か前に受けた手術）とを結びつけ、さらに脳血栓によって遮断されていた大量の記憶を呼び戻すことになった事例のひとつです。確かに、G・Rの記憶は完全な状態に戻ったわけではありませんが、彼は自分の記憶と「自分」という人間を取り戻すことができたのです。神経学者がこのケースをうまく表現しているように、あるひとつのできごとが、脳血栓によって「ゆがめられていた」脳の記憶回路を、正常に戻すことになったわけです。このような現象をよりわかりやすく説明するために、神経学者たちは上手な比喻を用いています。それは、G・Rの脳をコンパクトディスクに例えたもので、これは機械の一部が異常に加熱して、コンパクトディスクが楕円形に変形してしまい、判読が不可能になったというわけです。そして、彼のケースでは、記憶を保存する神経回路で部分的に磁気が消去してしまふような機能的変化を受けてしまいましたが、突然そのシステムにある情報（何年か前に受けた手術の記

憶）がインプットされ、何らかの方法でその神経回路が「修復」されたというわけです。

また、フランコ・マニャーニの事例も、G・Rのケースと同じように、典型的な臨床例となっています。神経学者で作家のオリヴァー・サックスも論文などで、マニャーニの事例が例外的な臨床例であることを紹介しています。それは「病理学的な」事例ではなく、ブルーストの「マドレーヌ」のような文学的なケースとG・Rのような臨床例とを結びつける理想的な橋渡しになっています。これら二つのケースでは、あるひとつの刺激（「マドレーヌ」や「部分麻酔下での外科手術」）が遠い過去の記憶を呼び戻してくれたわけですが、マニャーニのケースは記憶を探し求め、それを上手に甦らせることが、どれほど強迫観念にとりつかれるかということを示してくれるのです。

若い頃、マニャーニはトスカーナからサンフランシスコへ移住するために、生まれ故郷のポンティート村を捨てました。当時、まだ二五歳の若者だったマニャーニは、移住先のサンフランシスコで原因不明の病氣にかかり、高熱のため精神的な錯乱状態に陥ったのです。そんな状況の中、夢の中に生まれ故郷が現れ、鮮明なイメージとして村の通りなどが見えはじめました。さらには日中起きている時も、そんな幻が見えるようになり、病氣が回復した後もずっと嗜眠性脳炎（注：意識障害があつて睡眠が続く）という形で続いたのです。しかし、そのイメージがあまりにも鮮明で消え去ることがなかったので、彼は一九六七年から絵を描きはじめました。素朴ながら生き生きとした生まれ故郷の風景を描き続け、彼はすばらしい連作を生み出し

たのです。祖父の家、村の小道、広場、生家など、ポンティート村の風景は、記憶をたどって過去や自分の幼年時代の視覚イメージを具体的にすることによって、「彼の目に映し出された」モチーフを表現していました。

これらの「記憶の絵」に対するマニャーニの情熱は、当然のごとく人目にとまることになります。ポンティート村の実際の風景写真といっしょに、サンフランシスコ科学博物館で展覧会が開催されることになったのです。マニャーニが一度も生まれ故郷のポンティート村に戻ることなく、二〇年以上の歳月の間に完成させた絵の数々は、実在の風景の再現かと思われるほど忠実に描かれていました。そしてそれらの絵は、過去を再構成するとき、視覚イメージに基づく写真的な記憶がどれほどすばらしいものであるかを示していたのです。事実、マニャーニが描いた絵とポンティート村の風景とは、誰もが驚くほどよく似ていました。しかしそれは、決してマニャーニの絵が写真と同じように写實的に描かれていたわけではなく、あくまでも幼児期や青年期の記憶と結びついた、主観的な目で捉えられた風景画だったのです。それはちょうど、マルグリット・ユルスナールが子供の頃に住んでいた生家を訪れた時と同様に、思い出の情景は実際より、いつも拡大されて目に映っていたのです。

このようにマニャーニの事例では、サンフランシスコの展覧会の時に撮影された写真によって、彼の記憶と現実の世界とを実際に見比べることもできたわけです。この「記憶の画家」は、そのあと生まれ故郷に帰

る機会が二度ほどありましたが、彼にとってこの経験は決して心はずむものではありませんでした。というのも、自分が心に描いていた世界は現実の世界よりずっと鮮烈であったため、彼はいつも強迫観念めいた心境で思い出の世界に浸っていなければならなかったからです。これについては、オリヴァー・サックスも次のように書いています。

「マニャーニはサンフランシスコに住み、仕事に打ち込んでいたが、彼は自分の生活の大部分を、ポンティート村で暮らしていた過去の時代に生きていたのだ」

サックスの指摘している通り、ブルーストと同様にマニャーニも過去の世界に没り、過去の世界の中で暮らし、自分の記憶をあらゆる角度から再構成しようとしていたのです。

確かに、マニャーニの芸術性はブルーストとは異なってはいるものの、この二人の事例は私たちに次のようなことを教えてくれます。過去の記憶は人間の脳にすべて保存されていて、G・Rのケースのように、それがある日突然、消え去ってしまうこともあるし、またある時、ふいにそれが浮かび上がったり、時の流れの中でひとつひとつレンガを積み重ねるように、ゆっくりと頭の中に甦ってくることもあるのです。